日本未病システム学会雑誌　14(2)：306-309，2008

研究論文●42

8種類のワクチンとアルミニウム，水銀などのホメオパシーレメディーの使用と発達障害の改善について

由井　寅子*

1．目的

世界で問題となっている発達障害は，日本でも近年急増し大きな社会問題となっている。様々な分野から自閉症など発達障害に対する取り組みがなされており，ホメオパシーにおいても以前より英国のバーネット医師[1]，トレバー・ガン，スイスのエルミガー医師[2]，ブルガリアのマリオ・ボヤジェフ[3]，オランダのジャン・ショートン[4]など，多くのホメオパシー療法家(ホメオパス)によって行われている。しかし，従来の対処法では，発達障害への満足のいく効果は得られていないのが実状である。

これまでの知見と臨床経験から，発達障害をもつクライアントに対し8種ワクチン，水銀，アルミニウム，ストレスや腸の症状に合わせたレメディーを併用して繰り返し使用する新対処法を考案した。そこで本研究では，様々な対処法の中で新対処法を使用した場合，発達障害の改善に有効であるかを検証することを目的とした。

2．ホメオパシーの背景

ホメオパシー(同種療法)は，約200年前にドイツ人医師サミュエル・ハーネマン[5]によって確立されたもので，レメディーにより自然治癒力を喚起し治癒へと導く療法である。レメディーとは，原物質が理論上1分子も存在しなくなるほど，アルコール水溶液で高度に希釈振盪(薄め叩き)したものである。その症状を引き起こすものがその症状を改善するという同種の原理に基づいている。

3．方法

対象は，1998年以降，主訴として発達障害に関連する症状(学習障害，注意欠陥・多動性障害，自閉症など)をもつクライアントに対する由井の健康相談56件とした。クライアント(保護者を含む)の同意のもと記録したDVD映像を用い，時系列での行動状態の変化およびそれに対する保護者の発言に基づき評価・検証した。より客観性を保つため，評価・検証は，健康相談を実施したホメオパスではなく，他の日本ホメオパシー医学協会認定ホメオパスが行った。

2007年半ば以降から新対処法として，下記a～eを組み合わせて使用することで発達障害に対処した。

a）8種ワクチンレメディーの複合リキッド(注1：図1参照)

b）腸用レメディーの複合リキッド

c）ストレス用レメディーの複合リキッド

d）マーキュリアス(水銀のレメディー)

e）アルミナ(酸化アルミニウムのレメディー)

また，対象の56件を，①新対処法のケース(41件)，②レメディーを1種類ずつ順番に使用する従来法のケース(15件)に分類し，各ケースにつき6段階評価(健常児なみに改善，顕著に改善，改善，変化あり，変化なし・不明，悪化)を行った。対処法別に，各ケース間の改善状況

*日本ホメオパシー医学協会

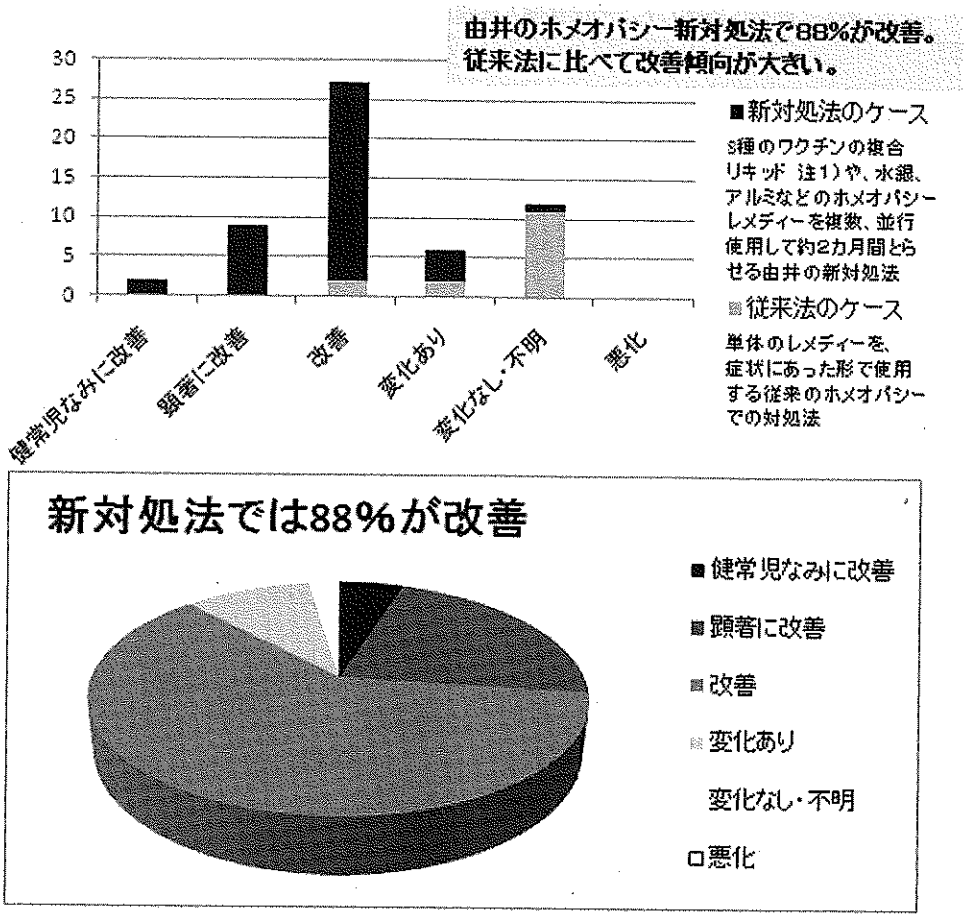

図１　新対処法と従来法の比較（由井の56ケース）

注１）自閉症の原因と思われる８種類のワクチンを希釈振盪して原物質がなくなるまで薄めたホメオパシーリキッド。

を比較検討した。

4．結果（図１）

１．新対処法のケース（41件）

健常児なみに改善２件，顕著に改善９件，改善25件，変化あり４件，変化なし・不明１件，悪化０件。

２．従来法のケース（15件）

健常児なみに改善０件，顕著に改善０件，改善２件，変化あり２件，変化なし・不明11件，悪化０件。

１の新対処法におけるケースの改善効果は，２の従来法のケースと比較して飛躍的に向上しており，効果の出現も早かった。また，従来法から新対処法に切り替え健康相談を実施した18ケース（新対処法に含む）を分析した結果，顕著に改善５件，改善および変化あり11件，変化なし２件と，新対処法の有効性を示す結果となった。

5．考察

新対処法では，従来法（レメディーを１種類ずつ使用）に比較して，改善効果は飛躍的に向上することが明らかとなった。特に，発達障害の症状の変化・改善の兆しが早く現れており，初回の健康相談での改善・変化が現れる割合も高い。そのことが，健康相談の継続率の上昇につながっており，この点も改善例数の増加に寄与していると考える。従来法では，発達障害の症状の変化・改善の兆しが現れるまでに時間を要したため，健康相談を途中で断念するケースもみられた。

ホメオパシーの観点から，「レメディーは同種でなければ共鳴せず，共鳴しなければ自己治癒力を揺り動かし，排出を促進することもない」のであるから，新対処法により８種のワクチン，水銀，アルミニウムのレメディー

表1　顕著に改善した7つの症例と水銀・アルミニウム中毒症状との比較

	水銀中毒												アルミニウム中毒							予防接種
	社会的引きこもり(自閉)	目を合わせない	お祭り騒ぎ	音に敏感	落ち着けない	マスターベーション(早熟)	多動	無感情(無表情)	理解できない	頭を打ちつける	暴力的(怒り)	叫ぶ	読み書き不全	学習能力障害	てんかん	衝動的	記憶障害	パニックと暴力	頑固	ほとんど受けている
症例①　5歳男児 自閉・言葉の遅れ	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
症例②　5歳男児 自閉・多動	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○		○	○			○
症例③　9歳男児 知能・言葉の遅れ	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
症例④　8歳男児 自閉・多動・言葉の遅れ	○	○			○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○
症例⑤　8歳男児 自閉・てんかん傾向・脳の異常	○	○		○	○			○	○				○	○	○	○	○	○	○	○
症例⑥　6歳男児 アスペルガー症候群		○		○	○	○	○		○		○	○				○		○	○	○
症例⑦　4歳男児 広汎性発達障害・自閉	○				○	○	○		○			○	○	○		○	○		○	○

を併用して繰り返し使用することで多くの事例で発達障害の症状の改善が認められたこと，特に8種ワクチンコンビネーションレメディー使用で高い改善効果を示したことは，現代日本における発達障害の要因としてワクチンが大きく関与していること，しかも複数のワクチンが体内で融合し一体となった形で存在していることが推測できる。

加えて，DPTなど一部のワクチンに含まれる水銀やアルミニウムのホメオパシーレメディーによっても発達障害の症状の改善が進んだことにも注目したい(ワクチンに含まれる水銀は有機水銀であるが，脳内で無機水銀に変化する)。また，今回評価・検証したケースの中から顕著な改善が認められた7つのケースを抽出し，ホメオパシーのマテリアメディカ[6]に掲載されている水銀やアルミニウム中毒にみられる症状と抽出した7つのケースでの改善状況との関連を検討すると，強い相関性が認められることがわかった(表1)[7]。マテリアメディカによると，アルミニウムの体内蓄積が多いほど，知的障害(＝精神遅滞)の傾向がみられ，「読み書き不全」「学習能力障害」「てんかん」「衝動的」「記憶障害」「パニック」「暴力的」「頑固」「ナイフや刃物を使いたがる」「高いところに登りたがる」「自閉的」「無感動」「無表情」「痛みがわからない」などの特徴がみられる。一方，水銀の体内蓄積が多いほど，多動的な傾向がみられ，「自閉」「社会からの引きこもり」「人と目を合わせない」「人間嫌い」「音に敏感」「落ち着けない」「マスターベーションをする」「早熟」「理解できない」「頭を何かに打ちつける」「暴力的」「叫ぶ」「涎が出る」「自律神経失調症」「見たものすべてを覚えてしまう」「緊張症」などの特徴がみられる。この相関性から，水銀やアルミニウムも発達障害

の主要な要因となっている可能性が強く，発達障害の危険を軽減するためには，子どもたちの体内に水銀やアルミニウムができるだけ蓄積しないようにすることが重要であり，そのためには第一に，子どもの体をつくる母親が水銀やアルミニウムを溜め込んでいないことが重要である。さらに，水銀やアルミニウムが直接的に血液中に侵入してしまう可能性が高いワクチン接種も，できる限り行わないことが重要である。水銀とアルミニウムの混合の危険性[8]は，前述のトレバー・ガンも指摘している。なお，日本で十分報道されなかったことは遺憾であるが，事実としてワクチンの防腐剤であるチメロサール(水銀系化合物)によって自閉症になったとして，Hannah Polingとその両親が米国保健福祉省に対して損害賠償を求めている裁判事件[9]において，2008年3月6日，米国保健福祉省は補償することを認めており，米国では同様の訴訟が5,000件以上に上っている。

以上から，特に脳の神経回路が完成する3歳までは極力，ワクチンをはじめ，水銀やアルミニウムの蓄積を避けることが重要であると考える。なお，発達障害が疑われる場合には，体内に蓄積したワクチンやワクチンに含まれる水銀，アルミニウムが原因となっている可能性が高いため，ホメオパシー療法によって早期にワクチンや水銀，アルミニウムの体外排出を試みることが有効であると考える。

今後はさらに症例を重ねることで，新対処法で用いるレメディーの種類と発達障害の症状との関連性の検証を含め，新対処法の応用と改善向上の可能性検証を進めていく必要があると考える。また，ホメオパシー療法の観点から発達障害の要因の1つと考えられるワクチンやアルミニウム，水銀の安全性もさらなる検証が必要と考える。

文　献

1）J・コンプトン・バーネット：発達障害の子どもたち―ホメオパシーで治癒可能な身体的・知的発達の遅れた子どもたち―，ホメオパシー出版，東京，2008.

2）ジャン・エルミガー：真の医学の再発見―ホメオパシーの新たな地平線―，pp. 170–175，ホメオパシー出版，東京，2008.

3）マリオ・ボヤジェフ：ホメオパシーの理論と実践　システマティック・アプローチ，pp. 43–45，ホメオパシー出版，東京，2006.

4）ジャン・ショートン：ホメオパシーとエレメント，pp. 72–74，pp. 106–109，ホメオパシー出版，東京，2006.

5）サミュエル・ハーネマン：医術のオルガノン第6版，ホメオパシー出版，東京，2007.

6）Murphy, R.：Nature's Materia Medica, Third Edition, 1,400 Homoeopathic and Herbal Remedies, pp. 106–111, pp. 1274–1277, Lotus Health Institute, VA, USA, 2006.

7）由井寅子：発達障害へのホメオパシー，pp. 155–156，ホメオパシー出版，東京，2008.

8）由井寅子：予防接種トンデモ論，pp. 155–156，ホメオパシー出版，東京，2008.

9）HANNAH POLING, a minor, by her Parents and Natural Guardians, TERRY POLING AND JON POLING, 02-1466V, March 2008.